

人間科学部現代社会学科に入学を予定されている皆さんへ
【入学前推薦図書のご案内】

常磐大学 人間科学部 現代社会学科

現代社会学科へのご入学、心より歓迎します。入学前の準備として、社会学に触れ、学びの土台を築くために教員より推薦図書のリストをお送りします。以下のリストから気になる本を選び、自由に読んでみてください。入学後の学びが一層深まることを願っています。

読書を通じて得た気づきや疑問は、ぜひ入学前スクーリングの際に共有してください。感想文等の作成や提出は求めません。現代社会学科は個々人の自由と自発性を重視しているからです。大学での4年間で充実したものとし、将来さらなる飛躍を遂げるためには、何よりも自発性が必要です。

現代社会学科での学びが、皆さんにとって豊かなものとなるよう、一緒に頑張っていきたいと思います。

全学学修サポート委員
河野 敬一

水嶋 陽子（家族社会学、現代社会論ほか）

■矢部太郎, 2024, 『大家さんと僕』新潮社.

NHK でアニメ化もされたため、ご存じの人もいるかもしれません。高齢の大家さんと、売れない芸人の僕が、一つ屋根の下で暮らす日々を描いた作品です。「家族未満だけれど他人以上」な二人の関係には、これからの人と人の結びつきをさぐるヒントがあるかもしれません。「ゆるい関係」が気になる人は、ぜひ手に取ってみてください。



■スリマニ L., 2018, 『ヌヌ 完璧なベビーシッター』集英社.

フランスの共働き家庭を舞台にしたサスペンス小説です。貧しい移民労働者のヌヌ（ベビーシッター）と雇い主家族との格差など、グローバル化した社会の負の側面を、そこに生きる人々の視点から描き出しています。これからの日本において、子育てについて考えるときにも、参考になる本です。



■六車由美, 2012, 『驚きの介護民俗学』医学書院.

著者は、元は大学の教員で、現在高齢者施設で働く方です。民俗学者の視点から眺めると、認知症高齢者の介護現場も一般的なイメージとは全く違った世界として見えてきます。社会学は、当たり前の世界を別の角度から捉えてみようとする学問です。そのため、本書は介護や認知症への理解を深められるだけではなく、社会学の面白さを追体験できる一冊です。



二方 龍紀（文化社会学、社会学基礎演習ほか）

■ダナ・ボイド, 2014, 『つながりっぱなしの日常を生きる——ソーシャルメディアが若者にもたらしたもの』草思社.

高校生の皆さんにとっては、あらゆる場面で、インターネットを利用することが、ごく自然な日常生活の一部になっていると思います。この本は、こうした新しい情報環境を生きるアメリカの若者などのインタビュー調査に基づく研究書です。著者は、若者は現代の情報環境という「文化的迷宮」を生きっていると述べています。この「文化的迷宮」をこれから生きていく皆さんにとって、情報環境の変容が社会に与えたインパクトを理解し、その活用のヒントになるものだと思います。



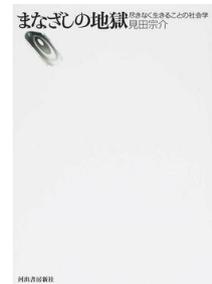
■ 浅野智彦, 2011, 『若者の気分 趣味縁からはじまる社会参加』岩波書店.

「大学生になったら、同じ趣味の友だちと『推し活』を思いっきりしたい！」そんな風を楽しみにしている人もいるでしょう。こうした趣味を通して、人間関係を広げることは、現代社会だけに特徴的な現象ではありません。著者は、趣味からつくられる「趣味縁」には、どのような可能性があるのか、様々な研究や歴史的経緯などをふまえて分析します。また、実際に若者対象の社会調査を実施し、そのデータを統計的な手法を使って分析しています。



■ 見田宗介, [1973] 2008, 『まなざしの地獄——尽きなく生きることの社会学』河出書房新社.

表題の論文は、皆さんと同じくらいの年齢の若者が起こした事件を事例に、人と社会のつながりについて考えた短い論考です。著者は、この本に関するインタビューの中で、「切れば血の出る社会学、〈人生の社会学〉」を作りたいと考え、この論考はその最初のサンプルであったと語っています（ここで著者が言う「切れば血の出る」という言葉は、「人びとの実践的な問題に答える」という意味かと思います）。今から50年以上前に起きた事件に関する論考ですが、新しく出版された河出書房版では、現代社会の問題とのつながりについての（社会学者の大澤真幸による）「解説」も収録されています。人と社会につながりについて考える社会学という学問の魅力に触れることができる一冊であると思います。



小森田 龍生（産業・労働社会学、社会学研究法ほか）

■ 見田宗介, 1996, 『現代社会の理論——情報化・消費化社会の現在と未来』岩波書店.

「現代社会の理論」と言いながら1996年の出版なのでやや古いのですが、現代社会についての基本的な理解は2024年現在においても役立つと思います。これから社会学を学んでいく上での基礎的な知識を得るために、強くお勧めしたい一冊です。



■ エーリッヒ・フロム, 1952, 『自由からの逃走（新版）』東京創元社.

私は大学3年生の時にこの本に出会いました。当時、書かれてあるすべての内容が理解できたわけではありませんでした。夢中になって読みふけり、そこから大学での勉強に面白さを感じ、真面目に取り組むようになりました。ぜひ、同じ体験をしてもらえると嬉しいです（内容は少し難しめです）。皆さん、「自由」に向き合う覚悟はありますか？



■岡檀, 2013, 『生き心地の良い町——この自殺率の低さには理由(わけ)がある』講談社.

この本では、全国でも極めて自殺の少ない四国のある町を対象として、その町において自殺が少ない(自殺率が低い)理由を検討しています。ここで本書を取り上げたのは、自ら問いを立て、それを綿密な現地調査(フィールドワーク)を通じて検討していくという、大学での学習・研究の手本になると思ったからです。社会学では、形のない社会を捉えるために「社会調査」を行います。問いを立て、自らの調査データに基づき問いに答えるというプロセス、そしてその愉しさに触れてもらえればと思います。



崔 蘭英 (言語文化論、海外研修 A・B・C ほか)

■竹内洋, 2008, 『社会学の名著30 (ちくま新書)』筑摩書房.

現代社会学科に入学する予定の皆さん、合格おめでとうございます。入学する前にどんな勉強をしたら良いだろうと、迷っていませんか。そんな方におすすめの一冊です。なぜなら、「社会学は、一見わかりやすそうで意外に手ごわい。ただし、良質な入門書、面白い解説書に導かれれば、見慣れたものの意味がめくるめく変容し、知的興奮を覚えるようになるはず。本書では、著者自身が面白く読んだ書30冊を厳選。社会学の虜になることうけあいの、最良のブックガイド」(本書表紙カバー裏より)であるからです。



■石井洋二郎・藤垣裕子, 2016, 『大人になるためのリベラルアーツ 思考演習12題』東京大学出版会.

生物的だけではなく、人間的にも「大人」になっていくための力が養われる一冊としておすすめします。

社会には、さまざまな価値観や考えを持っている人がいます。そうした異なる意見を持っている人たちに対して提案をしなければならない時に、皆さんはどうしますか? 無理矢理に押し付けるのでしょうか、それとも議論して受け入れてもらうようにしますか? 議論をスムーズに進行させるためには何が必要でしょうか。おおよそのところ、まずは確定的ではない仮の「結論」に向かって、さまざまな立場から賛否両論を戦わせ、自分と異なる主張に耳を傾けて、そして互いに疑問をぶつけ合い、相手を説得しようと試み、その過程で自分の考えを見直して必要に応じて修正し、場合によっては妥協を行いながら最終的な合意に達する、というプロセスを経てはじめて「議論を尽くした」と言えるでしょう。本書は東京大学の「後期教養教育」の授業を基に作られた



本ですが、教科書ではなく、授業で問題提起した論点について行われた議論を「再現」したものです。読み進めていくうちに、「問い」の立て方、ディベートを通じて自分の立場や見解を修正して相対化し、「結論」にたどり着くまでの力、いわゆる「思考の筋肉」が鍛えられます。思考を開き、自らを変えていこうとする人には、ぜひ活用してほしいです。

■岸本佐知子, 2004, 『わからない』白水社.

2024年6月に出版されたばかりの本です。翻訳家として知られている著者の岸本佐知子さんが、皆さんの生まれた頃の2000年代から最近までに書かれた文章が収録されています。「わからない」と題しての第一部エッセイ集、本にまつわる文章でまとめた第二部「本と人」、そして2000年から2008年までのウェブ日記から抜粋しての第三部、どれも著者の世界に引き込まれるものばかりで、固い頭の脳内革命を起こしてくれます。絶妙な着眼点に思わず二やけたり、深呼吸したり、著者との対話を存分に楽しめる心の糧になる一冊としておすすめします。



田嶋 知宏（司書課程、司書教諭課程の科目）

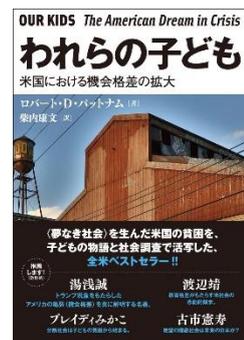
■宮内泰介, 2024, 『社会学をはじめる——複雑さを生きる技法』筑摩書房.

社会学は、どのようなことをしていく学問なのか。調査・分析・理論等を手がかりに、やさしく解説してくれている新書です。ぜひ、入学前に読んでいただければと思います。



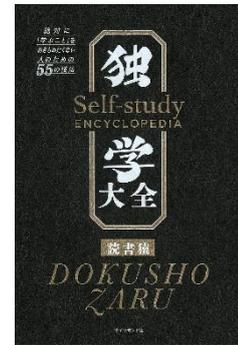
■ロバート・D・パットナム, 2017, 『われらの子ども——米国における機会格差の拡大』創元社.

アメリカ合衆国において格差が世代間連鎖するにより、機会格差が顕著になっている状況について、全米的な統計データ等の量的データで一般的な傾向を示すとともに、インタビューによる質的データによって具体的なイメージができるようにまとめられています。380ページほどあり、少し難しく感じる人もいるかもしれませんが。そんな人は、大学を卒業するまでにこの本を読み解けるようになろうと目標にいただければと思います。



■読書猿, 2020, 『独学大全——絶対に「学ぶこと」をあきらめたくない人のための 55 の技法』ダイヤモンド社.

タイトルに独学とありますが、大学でいろいろなことを学んでいくときのヒントになる内容が書かれた750ページほどある分厚い本です。本は、最初から最後まで全部読まなければダメだと思っている人が多いのではないのでしょうか。決して、全部を読もうとはしないでください。あなたが読むべき箇所は、最後に折り込まれている「独学困りごと索引」を使って確認してください。



北根精美（社会統計学、量的データの扱い方、国際社会学ほか）

■相場英雄, 2023, 『アンダークラス』小学館.

技術移転による国際貢献をかかげた外国人技能実習制度が、廃止されることが決まりました。この制度には、労働力を確保できない現場で低賃金労働力を確保するために、30年以上にわたり利用されてきた側面もあります。「アンダークラス」では、外国人技能実習生と老人介護施設で暮らす女性の経験を通して、私たちの社会のひずみを描き出します。読み始めたら止まらない警察小説です。なるせゆうせい脚本・監督の「縁の下のイミグレ」も合わせて見てください。



■仁平千香子, 2022, 『故郷を忘れた日本人へ——なぜ私たちは〈不安〉で〈生きにくい〉のか』啓文社書房.

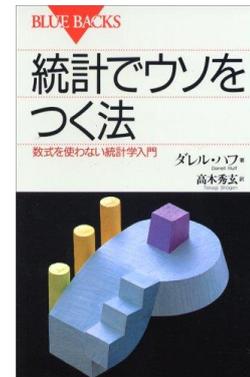
「〈不安〉で〈生きにくい〉」と感じるのはなぜでしょうか。著者は「日本という故郷への不安と地に根を張れないもどかしさ」から、未来に目標がたてられない状態に陥っていると言います。この本では日本社会にある漠然とした不安を、大正デモクラシーを生きた芥川龍之介、戦後の引揚者、米国日系人の苦悩を通して振り返る試みが描かれています。登場する多数の文学作品やノンフィクションも、読みたくなると思います。

故郷を忘れた日本人へ



■ Huff, D., 1954, *How to Lie with Statistics*, London: W. W. Norton & Company (高木秀玄訳, 1968, 『統計でウソをつく法』講談社).

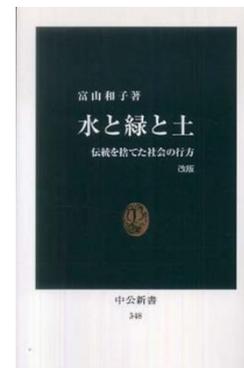
古い本ですが、数字、統計を使っただますり口を知るための、初心者向けの数式なしの本です。見た目がきれいなグラフやデータを使った資料を誰でも、AIでも作成できる時代だからこそ、データや統計指標の作られ方を理解する必要があります。情報発信者が示す「事実」を鵜呑みにせずに、立ち止まって統計的に考えるための知識を身につけましょう。



河野 敬一 (地理学、地理学特論A、都市地理学ほか)

■ 富山和子, 2010, 『水と緑と土ー伝統を捨てた社会の行方ー(改版)』中央公論社 (中公新書 348).

地理学では、私たちの生活の場である地域における「人間と自然との相互関係」を考えていきます。本書は、明治期以降、科学や技術を手にして自然を改変し利活用の幅を広げていった歴史をたどり、その課題を指摘しています。自然災害が多発する今こそ、生活の持続可能性を志向した自然との関係性のあり方を考えてみましょう。



■ 藤原正彦, 2005, 『国家の品格』新潮社 (新潮新書 141).

本書は、論理的思考で研究を進める数学者・藤原が、論理の限界を指摘し、日本人固有の「情緒の文化」を再認識することが、国際社会を生き抜く必須条件であると述べています。グローバル化がますます進展する現代社会。その中で私たち自身のアイデンティティを認識することの重要性について考えてみましょう。



■ 新田次郎, 1978, 『ある町の高い煙突』文藝春秋社 (文春文庫).

本書は、日立鉾山の煙害問題について史実を基に小説化したものです。2019年に本書を原作として同名の映画化もされたので観覧・視聴した人もおられるかもしれません。ここで描かれた明治・大正期の公害対策という苦難を乗り越えて工業都市日立が成立・発展したと言っても過言ではありません。郷土の近代史の一側面を知ることができる読みやすい一冊です。



小笠原 尚宏（地域社会学、社会調査実習、スポーツ社会学ほか）

■小林照幸, [1998] 2024, 『死の貝——日本住血吸虫症との闘い（新潮文庫）』新潮社.

この企画に際して、お勧めしたい書籍の流通状況を確認したところ、ことごとく絶版になっていることが判明。そんな中、インターネット上で注目され奇跡の復刊（文庫化）を遂げたのが本書である。

著者は薬学部出身のノンフィクション作家。本書は、地方病、風土病と恐れられた死病「日本住血吸虫症」を題材に、その病因解明から感染対策、撲滅に至る過程を丹念な資料収集とインタビュー、観察調査の手法を用いつつ記述していく。「事実」をどう集め、どうまとめていくか。社会学を志す高校生にぜひ読んでもらいたい1冊。著者の処女作『毒蛇』（これはハブの抗毒素開発をめぐるノンフィクション）もお勧めだが、こちらは絶版。



■Durkheim,Émile, 1897, *Le Suicide:Étude de sociologie*, Paris:Félix Alcan. (宮島喬訳,2018, 『自殺論（中公文庫）』中央公論新社.)

いわずと知れた、社会学の古典中の古典。

近代国家が成立されて以降、各国は国力を図るべく盛んに統計調査を実施していく。デュルケムは、これら既存の統計から「自殺」に関する統計を抜き出し、検討を加えることを通して、「自殺」は「社会的現象」とであると論じていく。数字の羅列（統計資料）から、何が読み取れるのか。社会的なものの方の見方、考え方を知るうえで、最良な一冊。

（おそらく、翻訳が優れていることもあって）社会学書の中では、群を抜いて読みやすいと思う。ぜひ、手に取ってください。



■宮本常一, [1960] 1984, 『忘れられた日本人（岩波文庫）』岩波書店.

皆さんは、大学卒業後、どのような進路を考えているだろうか。多くは、「勤め人」になって生計を立て、結婚して・・・、といった安定した人生を想定していることだろう。実際、2023年度の現代社会学科の卒業生の就職率は100%。

しかし、こうしたサラリーマン化（賃労働者化）は、近代化、日本においては高度経済成長期以降に普遍化した現象であり、かつては、多種多様な生き方、暮らし方が存在していた。

著者の宮本常一は在野の民俗学者。渋沢敬三（新しい1万円札の人（栄一）の孫）の支援により、日本各地を旅し、市井の暮らしを書き残した。

急速に合理化、画一化が進行していく高度成長期（1954-73）のど真ん中（初版1960）に出版された本書は、忘れられようとしている、少し昔の日本人の暮らしが鮮やかに描かれ



ている。区有文書を貸すか、貸さないかで1日議論する村の寄り合い。飢饉に備えた生活術……。近代化の過程で、日本人は何を失ったのだろうか。

笹原 康孝（データサイエンス概論、データ分析演習ほか）

■宇田川敦史, 2025, 『アルゴリズム・AIを疑う——誰がブラックボックスをつくるのか』集英社（集英社新書）.

私たちが利用する検索結果や SNS の表示順、通販サイトのおすすめは、AI を含むアルゴリズムによって決められています。本書は、その仕組みや背景を Amazon や食べログなど身近な事例をもとに説明し、なぜそれが「ブラックボックス」とされるのかをわかりやすく示しています。

便利さの一方で、情報の並びや基準は私たちの知らないところで決められています。大学で学び始める今こそ、こうした仕組みに少し目を向け、自分の判断で受け止める姿勢を育てるきっかけにしてほしい一冊です。



■トム・チヴァース, デイヴィット・チヴァース, (北澤京子訳, 2022, 『ニュースの数字をどう読むか——統計にだまされないための 22 章』筑摩書房）.

私たちは日々のニュースで、感染者数や合格率、前年比など多くの数字に触れています。本書は、それらの数字がどのように提示され、どこに誤解の余地が潜んでいるのかを、22 の事例を通してわかりやすく解説しています。分母や比較対象、相関と因果の違いなど、数字を読み解く基本を学ぶことができます。

数字は一見客観的に見えても、見せ方や解釈次第で印象は変わります。大学で学びを始める皆さんにとって、情報をそのまま受け取るのではなく、自分の頭で吟味する姿勢を養うきっかけとなる一冊です。



■小熊英二, 2019, 『日本社会のしくみ——雇用・教育・福祉の歴史社会学』講談社（講談社現代新書）.

日本の社会は、雇用・教育・福祉といった制度を基盤として形づくられてきました。本書は、その成り立ちを歴史的にたどりながら、現在の日本社会の特徴や課題をわかりやすく示しています。

格差や非正規雇用、将来の不安など、私たちが直面する問題の背景にはどのような仕組みがあるのか。大学で学び始める今、日本社会を大きな視点から理解するきっかけとして手に取ってほしい一冊です。

